

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(1) 近赤外線 of 皮膚および脂腺細胞に及ぼす影響について</p> <p>近赤外線 of 皮膚に及ぼす影響についての検討は、世界的に見てもまだその緒についたところであり、十分な解析データは報告されていない。我々は近赤外線照射装置を開発し、それを用いて3次元培養皮膚、培養脂腺細胞に近赤外線を照射することにより、表皮、真皮、脂腺細胞からの種々の炎症性サイトカインの産生、形態変化、脂腺増殖機能などを検討している。これまで知られていなかった近赤外線 of 皮膚および脂腺に対する功罪が明らかになる可能性と、光老化あるいは痤瘡の病態解明さらには治療法の開発につながる可能性がある。</p>	川島教授	1
<p>(2) 顔面の皮膚疾患におけるフソバクテリアの関与に関する研究</p> <p>酒さ様皮膚炎、口囲皮膚炎、脂漏性皮膚炎、アトピー性皮膚炎など、顔面に皮膚炎を起こす患者で、Tape stripping toluidine blue法を用いて、病変部よりフソバクテリアの検出を試み、その陽性率、検出部位、検出時期および治療経過などを検討し、疾患による差異を解析している。病因としてのフソバクテリアの意義と、疾患発症メカニズムの解明につながり、より適切な治療法の確立に結びつくことが考えられる。</p>	石黒准教授	1
<p>(3) アトピー性皮膚炎におけるサイトカイン・ケモカインの関与に関する研究</p> <p>アトピー性皮膚炎の病態には免疫反応が深く関与しているが、その中でサイトカインやケモカインは重要な役割を果たしている。サイトカインやケモカインは表皮細胞、浸潤リンパ球、血管内皮細胞、樹状細胞など種々の細胞によって産生され、お互いの活性化や遊走などを司っている。アトピー性皮膚炎の病変部や末梢血中で増加しているサイトカインやケモカインを同定し、その機能を<i>in vitro</i>で解析している。重要な働きをしているサイトカインやケモカインが見いだされれば、病勢マーカーとして利用でき、さらにはそのサイトカインやケモカインの阻害薬や受容体の阻害薬は治療に結びつく可能性がある。</p>	常深准教授	1